



BOOGAMANIA



第三部

009没収

010勘当

011転落

012仙人

湖南徹

BOOGAMANIA (009) : 没収

金田金子は、マイバッハ62Sに乗って、二〇〇億円の建築費をかけて築いた豪邸——建築費の殆どは関係者の懐に収まっていて、実際にかかっている費用は一億円にもならない欠陥建築——に戻った。

門の前に、数十台の自動車が停まっていた。

埃に塗れた、車検を通りそうもないしょぼい庶民の軽トラックばかりだ。

金田金子の頭に血が上った。

——一体誰の車？ こんな下等な車ばかり並べて……。迷惑でしょ。入れないじゃない！

窓を半分下ろすと、

「ちょっと、どかしなさい！ 邪魔よ！ 入れないじゃないの！」

趣味の悪い金縁の眼鏡をかけた、背広姿の中年男性が近付く。

「金田金子さんですか？」

気安く呼ぶな、と思いつつも、

「そうよ。あなたは？」

「弁護士の橋元と言います」

——弁護士ね。道理で詐欺師っぽく見えた。

「何故弁護士が？」

「契約執行の為ですよ。金田金子さんですよ？ 前総帥の妻の」

「そうだけど。これらの車は何？」

「屋敷を没収に参りました」

金田金子は車の天井に頭をめり込ませる勢いで飛び上がった。

「没収？ 何故？」

「金田金子さんは全財産を新総裁に譲渡する契約書に署名しましたよね？」

「いえ、保有株の一部を譲渡するという契約には署名しましたが……」

「この契約書に寄ると全財産を新総裁に譲渡するという事になっていますが」

と、橋元弁護士は、見覚えのある契約書のコピーを見せびらかした。「これ、金田金子さんの署名と捺印ですよ？」

「で、ですが、契約書は保有株の一部……」

橋元弁護士は、契約書の中央辺りを指した。

「ここに『全財産を新総裁に無条件で譲渡する』と明記してありますが。読まなかったんですか？」

「よ、読みましたが……」

橋元弁護士は、『嘘つけ』と言わんばかりに、鼻で笑った。

「じゃ、いいでしょう。あなたは新総裁に全財産を無条件で譲渡した」

「あたしはそういう意味で署名したんじゃないじゃないですか！」

「そういう意味もこういう意味もありませんよ。署名・捺印した以上、あなたは無条件で譲渡する事に合意したんです」

「嘘よ！」

「嘘じゃありません」

「そんな契約書、有効な訳がない！」

「裁判所で争いますか？」

「争う！」

「自分で自分を弁護出来ますかね？」

「どういう意味？」

「私は橋元弁護士ですよ。橋元総合法律事務所のね。我が国屈指のハイパーウルトラスーパー弁護士です。これまで訴訟で一度も負けた事は無い。あらゆる裏工作もしますからね。裁判官の買収、相手弁護士の脅迫や焼き討ち等々。私を相手に法廷で争いたがる無謀な弁護士なんていません。ですから、私が手掛ける係争では、相手は弁護士抜きで法廷に立つ事になります」

「そんな馬鹿な……」

「馬鹿じゃありませんよ。アホです。脳足りんです。間抜けです。頓馬です。唐変木です。ストコドッコイです。プンプクリンです。アンポンタンです。チンチクリンです。プンプンポンです。ポレポレポレです。フニャフニャホニャです。ポッテポッテです。さ、この車も譲渡した財産に含まれますので、出て下さい」

「嫌よ！」

橋元弁護士は溜息をつき、

「しょうがないなあ。……運転手さん、手伝って下さい」

「はい」

世界最高の腕を持つとされながらも、実は白内障と緑内障を患っているショファーは、マイバッハ62Sから出た。後部ドアを大きく開く。

「ちょっと、何するの！」

ショファーは、薄汚い溝鼠を見つめる表情で、

「お前はこの車に乗る資格はもうねえんだ。出ろ」

「でも、運転手さん……」

「何が『運転手さん』だ。俺を散々ゴミ扱いしていたくせに」

「ゴミ扱いなんてしていない！」

「先日道を間違えたら散々罵倒したじゃないか」

「それは……」

「お前の指示通りに曲がったんだぞ。俺はその道は間違っている、ときちんと忠告したがな」

「だって……」

「他に色々あって、全部述べていたら日が暮れちまう。だから今更泣き落とそうとするな。カス女が。さ、出ろ」

「嫌！」

「さっさと出ろ、この馬鹿女」

「あたしは馬鹿女じゃない！」

「じゃあ糞女だ」

「糞女じゃない！」

「じゃあ、馬鹿で糞なカス女だ。出ろ」

「嫌！」

「嫌も糞もねえんだよ」

と、ショファーはシートベルトを解除すると、金田金子をマイバッハ62から引きずり出した。ドアを閉める。

橋元弁護士は、笑顔で、

「じゃ、運転手さん、本社にお戻り下さい。総帥がお呼びです」

ショファーも笑顔だった。先程の苦り切った表情は欠片も無い。

「裏切讓総帥ですね？ かしこまりました」

と、言うのと、さっさと運転席に乗り込み、発進させる。

金田金子は、マイバッハ62が去るのを黙って見守るしかなかった。

「何故こんな事に……」

橋元弁護士は肩をすくめた。

「全財産を無条件で譲渡したんだから、当たり前でしょう。……あ、すみません」

と言うと、金田金子のショルダーバッグを強引に奪った。開くと、中身を確認する。

「ちょっと！ 何するの！」

「これも没収の対象ですから。中身もね」

「でも……！」

「でもも糞もありません。貰います。……これはいらないな」

と、橋元弁護士はコンドームや生理用品やバイブレーターを地面に捨てる。「……あ、そうか」

金田金子は一步下がった。

「何よ？」

「あなたが着ている服も没収の対象です。脱いで下さい」

金田金子は顔面を真っ赤にすると、

「脱ぐ訳ないでしょう！」

「脱いでこちらに渡さないと契約違反になります。訴えられますよ」

「訴えられるものなら訴えてみてよ！」

「私は橋元弁護士ですよ。橋元総合法律事務所のね。我が国屈指のハイパーウルトラスーパー弁護士です。これまで訴訟で一度も負けた事は無い。あらゆる裏工作もしますからね。裁判官の買収、相手弁護士の脅迫や焼き討ち等々。ですから、私が訴えると、必ず私の思い描く通りの判決が出ます」

「そんなの関係無い！」

橋元弁護士は頭を掻いた。

「もう、しょうがないなあ。……皆さん、手伝って下さい」

その言葉で、没収の作業に当たっていた者が、ぞろぞろと集まってきた。

「彼女の服も没収するので、手伝って下さい」

「ハイ」

と、集まった全員が異口同音に答える。金田金子に近付いてきた。

「嫌！」

金田金子は叫ぶと、走り出した。

ただ、グッチのハイヒール——と言われつつも、実は中国製の紛い物——を履いていると、全力疾走は無理。元々スポーツは不得意である。学生の頃スポーツ万能と評されたのは、彼女が大企業グループ——ゴウマン・インターナショナル・グループ——の会長令嬢で、周辺がおべっかを使っていたからだ。

動き易い格好の作業員を振り切るのは不可能だった。

金田金子はタックルされ、数十人によって地面に押さえ付けられた。

「離してよ！ あたしを誰だと思ってるの？」

作業員らが、肩をすくめ、

「誰だったけ、この屑女？」

「さあ」

「知らん」

「見た目は悪くないけど」

「どうせ整形だろ。全身整形していても不思議じゃない」

「あたしは整形なんてしてない！ ま、目と鼻と口と耳とオッパイとお尻と足と手と髪は多少いじったし、脂肪吸引の経験もあるけど」

「ほれ見ろ。整形女だ」

「オッパイも整形か……。最低だ。屑女だ。死ねばいいのに」

「最低じゃない！ 屑女じゃない！ あたしを誰だと……」

「BOOGAMANIAを発症した金田金太郎の妻だね。前日まではともかく、今は屑女だ」

と、橋元弁護士は何食わぬ顔で近付いた。「下着は後で没収するんで、他は全て脱がせてくれ」

「ハーイ」

と、押さえ付けている全員が異口同音に答える。暴れようとする金田金子を何でも無いように押さえ付けたまま、着ているものを脱がせ始めた。

シャネルやプラダやグッチの服——という事になっているが、実際はインドで作られた紛い物——を脱がされた金田金子は、下着姿になった。

押さえ付けていた作業員が、漸く離れる。

橋元弁護士は、脱がされた服を回収すると、

「先程言いましたが、下着は後で送り返して下さい」

「こんな事が許されると思ってるの？」

「勿論思ってますよ。本当は下着までここで没収したいのですが、流石に女性を真っ裸にするのは心が痛みますので、下着は後で回収、という事にしました。感謝してもらいたいくらいです」

「誰が感謝するか！」

と、金田金子は掴みかかろうとした。

橋元弁護士は、苦もなく彼女の手から逃れる。

「いい加減にしないと、ここで下着も没収しますよ」

金田金子は情けなくなった。涙ぐみながら、

「あたしはどうすればいいの？ どこに行けばいいの？」

「さあ。実家に帰る、という手もありますね。あ、そうか。お金が無いんですよね。お貸しします」

と、橋元弁護士は言う、コーチの長財布から一万円札を出し、金田金子に押し付けた。「これで帰れるでしょう。下着と一緒に帰して下されば結構です。利子は一日一〇・五%、いや一五・八%で結構です。では」

橋元弁護士と、作業員らは、潮が引く様に金田金子から離れた。

金田金子は下着姿のまま、路上に取り残された。無意識の内に紙幣を拾う。

「何故こんな事に……」

BOOGAMANIA (010) : 勘当

金田金子は、実家である大企業グループーゴウマン・インターナショナル・グループーの会長宅に辿り着いた。

下着姿で街中を移動するのは死にたくなる程の屈辱だったが、止むを得なかった。

とにかく、実家に戻れた。

これで安心だ。

思えば、彼女は時価総額数十兆円のネズミコー・グループの総帥の妻ではなくなってしまったが、年商数十兆円のゴウマン・インターナショナル・グループの会長令嬢であるのは変わらないのだ。

——そうよ。あたしは会長令嬢。何も落ち込む事ないじゃない。

金田金子は、門を潜り、広大な前庭を経て、建蔽率を完全に無視して建てられた豪邸（実は低級建材の寄せ集めで、見た目だけであり、不動産物件としては糞の価値もない）に近付いた。

正面玄関から中に入る。

下手なマンションなら五、六棟は建てられる広大なエントランスホールが広がる。

「糞親父——じゃなくて——お父様、どこにいらっしゃいますの？」

返事は無い。

「糞親父——じゃなくて——お父様？」

やはり返事は無い。

おかしい。いつもなら、この時間は自宅にいて、若い女とやりまくっているのに。

「糞親父——じゃなくて——お父様？」

……と、その時。

奥から人影が現れた。

紛れも無く父親の郷満太郎だ。

「糞親父——じゃなくて——お父様！」

金田金子は、泣きながら父親へと駆け寄った。

「……金子か？」

金田金子は、父親に抱き付いた。

「そうです、糞親父——じゃなくて——お父様！」

「おお、帰って来てくれたのか。久し振りだな。顔を見せてくれ」

金田金子は、満面の笑みを父親に向けた。

「……え？」

郷満太郎はひょっとこ顔を披露していた。しかも下半身は裸で、萎み切った男性自身が丸見えだ。

「糞親父——じゃなくて——お父様、何故ひょっとこ顔なんですか？ 何故フルチンなんですか？」

郷満太郎は首を傾げ、

「ひょっとこ顔？ 儂はひょっとこ顔なんてしとらんぞ」

「では、何故目を大きく開いて口をすぼめているんですの？」

郷満太郎はますます首を傾げた。

「儂は目を大きく開いて口をすぼめてなんかいないよ。そんな無意味な事をする訳がない」

「では、何故フルチンなんですか？」

「儂はフルチンなんかでないよ。そんな破廉恥な事をする訳がない」

「でも、下に何も身に付けていないじゃないですか」

「儂はきちんと衣服を身に着けている」

と、郷満太郎は、何も身に付けていない自身の尻をペシペシ叩いた。「最高級の衣服だ。これ以上の衣服は存在しない。……BOOGA」

金田金子は蒼くなった。

「『ブーガ』て何ですか、糞親父——じゃなくて——お父様？」

郷満太郎は更に首を傾げた。

「『ブーガ』？ そんな事言っていないよ。……BOOGA」

「また言いましたけど」

「え？ そうかい？ 言っていないけど。……BOOGA」

「また言ったじゃない！」

「嘘言うな。僕は『ブーガ』なんて言っていないよ。……BOOGA」

「ま、また言いました」

郷満太郎はひょっとこ顔を怒りで赤くした。

「僕は『ブーガ』なんて言っていない！ 何故僕がそんな無意味な事を口走るんだ？ ……BOOGA」

「ま、また言ったじゃないですか」

「言っていない！」

と、郷満太郎は飛び上がって叫んだ。「僕が『ブーガ』なんて言う訳ないだろうが！ ……BOOGA」

「で、でも……」

「僕は無意味な事は何も言わないのだ！ ……BOOGA。無意味な事を口走る奴が巨万の富を築ける訳がない！ ……BOOGA。だから僕は『ブーガ』等といったつまらない事は口走らないのだ！ ……BOOGA」

金田金子は大粒の涙を流した。

「糞親父——じゃなくて——お父様、気確かに……」

郷満太郎は、広大なエントランスホールを、六〇歳とは思えない速度で駆け回った。

「僕は『ブーガ』なんて言っていない！ ……BOOGA。言って何の意味がある？ ……BOOGA。つまらない事を口走る余地なんて僕には無いのだ！ そこに転がっている無能で下等な庶民ではないのだからな！ ……BOOGA。……BOOGA。……BOOGA」

「く、糞親父——じゃなくて——お父様……」

「……BOOGA、BOOGA、BOOGA！ ……BOOGAAAAAAAAAAAAA！」

と、郷満太郎は奇声を上げると、大理石の床に頭を打ち付け始めた。

床を砕いてやる、と言わんばかりの勢いで自身の額を接触させる。

「糞親父——じゃなくて——お父様、止めて下さい！」

「BOOGAAAAAAAAAAAA！ BOOGAAAAAAAAAAAA！ BOOGAAAAAAAAAAAA！」

郷満太郎は、血達磨になりながら、全体重をかけて自身の頭部を勢い良く床に叩き付けた。意識があるのが不思議としか言いようがない。

「ヒイイイイッ」

金田金子は、正面玄関へ向かってダッシュした。

が、何者かが出口を塞いでいるので、外に出られない。

「……郷満氏はBOOGAMANIAを発症してしまったようですね」

と、橋元弁護士が言う。エントランスホールに踏み入った。

「非常に残念な事だ」

後に続いてエントランスホールに入ったネズミコー・グループ新総帥裏切譲が、ちっとも残念そうでない表情で言う。

「あんたらは何故ここに……」

「金田金子たる者が下着姿で何をやってるんです？」

「あんたがこうした格好にさせたんでしょ！」

と、金田金子は嘔み付いた。

橋元弁護士は、とぼけた表情で、

「え？ そうでしたけ？ 知りませんな」

「あんたらはここに何しに来たの？」

橋元弁護士は肩をすくめ、

「契約の執行に参りました」

「契約？ 何の契約よ？」

「この契約です」

と、橋元弁護士は、見慣れた紙切れを披露した。

「それは……」

金田金子が数時間前に署名・捺印した契約書だった。

「その契約は総帥の財産を譲渡する、てものでしょ？」

「え？ ああ、そうですね。第一条はね。第二条は違いますよ」

「第二条？」

橋元弁護士は、紙切れの中心より下を指すと、

「ここを読んでなかったんですか？ そんな訳はないでしょう。この文章は小学生でも理解出来ます。いえ、幼稚園児でも、胎児でも理解出来ますから」

「……読んだ筈だけど……」

「それなら、『父親の郷満太郎がBOOGAMANIAを発症したら全財産をネズミコー・グループに無条件で譲渡する』という条項も読んだでしょう？ 読んで、理解して、納得した上で署名・捺印したんですよ？」

「……そうかも知れない……」

裏切讓新総帥は、笑顔で、

「それなら、郷満氏の全財産を無条件で譲渡してくれますよね？」

「で、でも！ 今譲渡したら困る……」

橋元弁護士は肩を再度すくめ、

「金田金子さんが困る、困らないなんて関係ないです。郷満氏がBOOGAMANIAを発症してしまった以上、無条件で譲渡してくれないと」

「そんなの許さない！」

「契約違反になりますよ。訴えますよ。いいのですか？」

「訴えればいいじゃない！」

「あなたは自分で自分を弁護出来るんですか？」

「どういう意味？」

「私は橋元弁護士ですよ。橋元総合法律事務所のね。我が国屈指のハイパーウルトラスーパー弁護士です。これまで訴訟で一度も負けた事は無い。あらゆる裏工作もしますからね。裁判官の買収、相手弁護士の脅迫や焼き討ち等々。私を相手に法廷で争いたがる無謀な弁護士なんていません。ですから、私が手掛ける係争では、相手は弁護士抜きで法廷に立つ事になります」

「そんな馬鹿な……」

「馬鹿じゃありませんよ。アホです。脳足りんです。間抜けです。頓馬です。唐変木です。ストコドッコイです。プンプクリンです。アンポンタンです。チンチクリンです。プンプンです。ポレポレポレです。フニャフニャホニャです。ポッテポッテです。さ、この屋敷も譲渡した財産に含まれますので、出て下さい」

「嫌よ！」

裏切讓新総帥が、

「あと、その下着も財産にカウントされるんだがね。そろそろ渡してももらわないと困る」

「渡す訳ないでしょう！」

橋元弁護士は溜息をつき、

「往生際の悪い糞女だな。……おい、この女の下着を回収しろ」

その言葉と同時に、数十人の作業員——数時間前と同じ——が、屋敷に上がり込んだ。

「ここはあたしの家よ！ 入らないで！」

「ここはもうネズミコー・グループの所有物なんだ。お前にあれこれ言われる筋合いは無い。さ、下着を回収しろ」

作業員は、全力疾走で金田金子に迫って来た。

金田金子はエントランスホールの奥へと逃げた。

「離れてよ、この馬鹿！」

無知で無学で無能な作業員らが、金田金子の命令に耳を貸す訳がなかった。ペースを落とす事無く前進し、ダイブする。

金田金子は、左足にタックルを受け、床に倒れた。

作業員らが押し寄せ、彼女を押しさえ付ける。

「離せ、馬鹿、アホ、変態！」

「さっさと回収しろ」

と、橋元弁護士が命じる。

作業員らは、リハーサルしていたのか、という慣れた手付きで金田金子から下着を引き剥がした。

「変態！」

作業員らは、真っ裸の金田金子には目もくれず、駆け足で橋元弁護士と裏切譲新総帥の下へ戻った。

「没収の作業を開始しろ」

「へい」

作業員らは散り散りになって、屋敷の中を駆け巡った。

橋元弁護士と裏切譲新総帥は、何食わぬ顔で金田金子に近付いた。

「あれ？ 会長令嬢ではないですか。真っ裸で何をやってるんです？」

「あんたらがこうしたんでしょ！」

と、金田金子は噛み付いた。

橋元弁護士は、とぼけた表情で、

「え？ そうでしたけ？ 知りませんな。ここはもうネズミコー・グループの所有物で、金田金子さんとは無関係の物件です。さっさと退去して下さい」

「どこに行けばいいの？」

「さあ。どこでも勝手に行けばいいでしょう」

裏切譲新総帥が、前に出る。

「俺が送ってやってもいいぞ」

「……どこへ？」

「どこだっていいだろう」

と、裏切譲新総帥は言う、「おい、運転手！」

その呼びかけで、見覚えのあるショファーが姿を現した。

「何でしょう？」

「こいつを適当なところに捨てておけ」

「かしこまりました」

と、ショファーは恭しく言うと、糞つまらなさそうな顔で金田金子の肩を掴んだ。「さ、来い」

「ど、どこへ連れて行くの？」

「適当なところだ」

と、ショファ―は言いながら、金田金子を屋敷の外に連れ出した。

見慣れたドイツ製超高級車マイバッハ62Sが目の前にあった。

ショファ―は、トランクを開けると、

「さっさと入れ」

「車内じゃないの？」

「トランクも車内だろ」

「そうじゃなくて、座席じゃないの？」

「お前みたいな糞の価値も無い糞女には、トランクも勿体無いんだ。さっさと入れ！」

「糞女じゃない！」

「糞女だ」

「糞女じゃない！」

「糞女だ」

「糞女じゃない！」

「糞女だ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃ……」

「糞、糞、糞、糞、糞女」

と、ショファ―は、腰を振って踊った。

「糞女じゃ……」

「糞、糞、糞、糞、糞女！」

と、ショファ―は、腰を振って踊り続けた。

「糞女じゃ……」

ショファ―は、金田金子を無視して踊り続けた。下手な歌も続ける。

糞、糞、糞、糞、糞女！

頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞女！

生み出せるのは糞しかない

糞、糞、糞、糞、糞女！
言う事やる事全て糞

糞、糞、糞、糞、糞女！
糞に塗れて死ぬだろう

糞、糞、糞、糞、糞女！
糞、糞、糞、糞、糞女！

「糞女……」

「おお、糞女と認めたか」

と、ショファーは遮った。「さっさとトランクに入れ」

「……何か身に付けさせて」

「下らない事を口走っている暇があったらさっさと入れ！」

と、ショファーは年齢や不摂生を感じさせない勢いで金田金子をトランクに蹴り入れると、ロックを破壊する勢いで閉めた。

真っ暗な中、金田金子は泣いた。

何故自分がこんな目に遭うのか、と。

BOOGAMANIA (011) : 転落

何時間、いや何日間真っ暗な中で揺られていたのか、分からない。

——いつまでここに留まってなきゃならないのよ？ トイレに行きたくなってきたし……。

と、金田金子は、マイバッハ62Sのトランク内で揺られながら愚痴をこぼした。

振動が不意に止んだ。

——な、何？

……と思ったら、光に包まれた。

金田金子は顔をしかめながら辺りを見回した。

「さっさと下りろ、糞女」

と、ショファーが糞面白なさそうな表情で言う。

「糞女じゃない！」

「糞女だ」

「糞女じゃない！」

「糞女だ」

「糞女じゃない！」

「糞女だ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃ……」

「糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃ……」

「糞、糞、糞、糞、糞女」

と、ショファーは、腰を振って踊った。

「糞女じゃ……」

「糞、糞、糞、糞、糞女！」

と、ショファーは、腰を振って踊り続けた。

「糞女じゃ……」

「糞、糞、糞、糞、糞女！」

ショファーは、金田金子を無視して踊り続けた。下手な歌も続ける。

糞、糞、糞、糞、糞女！

頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞女！

生み出せるのは糞しかない

糞、糞、糞、糞、糞女！

言う事やる事全て糞

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞に塗れて死ぬだろう

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞、糞、糞、糞、糞女！

「糞女……」

「糞女と認めたか」

と、ショファーは彼女を遮った。「さっさと下りろ」

「ここはどこ？」

「うるせえ。さっさと下りろ、てんだ！」

金田金子は嫌々ながらトランクから這い出た。

周囲を確認する。

樹木に囲まれていた。枝葉が何層にも重なり合い、日が殆ど差して来ない。

空気はひんやりとしていて、肌寒く感じた。

マイバッハ62Sは、山道をかなり長い時間をかけて走行していたらしい。

金田金子の全身に鳥肌が立った。真っ裸だったのを改めて思い出す。

「何か身に付けるものをちょうだい」

「分かった、分かった」

と、ショファーは面倒くさそうにぼやくと、ネクタイを外し、投げ渡した。

金田金子は、地面に落ちたモザンビーク産の汗染みに塗れたネクタイを見つめていたが、
「そうじゃなくて！」

「身に付けるものを寄越せ、て言ったじゃないか。だから渡してやった。いいだろ？」

と、ショファーは言うど、運転席に戻った。

「あたしを置いてかないで！」

「うるせえんだよ。ぶっ殺されてそこらに埋められなかつただけでも感謝しろ」

と、ショファーは吐き捨てるど、V12エンジンをスタートさせた。

金田金子はマイバッハにしがみ付こうとしたが、掴めるところが無い。

「待って！」

「何も聞こえねえ、何も聞こえねえ、何も聞こえねえ」

と、ショファーは呟くと、マイバッハを発進させた。

「待って！」

「何も聞こえねえ、何も聞こえねえ、何も聞こえねえ！」

と、ショファーは歌った。

金田金子はマイバッハの後を追った。

狭い山道で、速度は大して上げられなかったが、走って追い駆ける人間にいつまでも付き纏われる程非力な車輜ではなかった。

金田金子が躓いてバランスを失ったのを機に、距離が開き始めた。

こうなると、安定して前進出来るマイバッハに分がある。

「待って！」

金田金子は全力疾走で追尾しようとしたが、裸足で葉に覆われた地面を駆けているので、思うように走れない

。

みるみる引き離されると、マイバッハはカーブを曲がったところで視界から消えた。

金田金子がカーブに達した時点で、マイバッハのエンジン音すら聞こえなくなっていた。

「糞運転手が！ 何故あたしをこんなところで降ろすのよ！」

と、齒軋りした。

マイバッハの姿こそ見失ったが、後を付ければどこかへ通じるだろう、と思い、山道を歩いた

。

五分程歩くと、道は二手に分かれた。

いずれにもタイヤ跡らしき痕跡が残っていて、マイバッハがどの道を利用したのか、見当も付かない。

右に向かう道は下っていて、左へ向かう道は上がっている様に見えたので、右の道を進む事にした。

「イタッ」

金田金子は歩くのを止め、足の裏を確認する。

何かを踏ん付けて切ってしまったらしい。出血していた。

「もうっ！ 何で真っ裸で山の中を歩かなきゃ駄目なのよ！」

と、愚痴を放った一瞬後、盛大にくしゃみした。

肌寒かった事を思い出した。

彼女は地面にへたり込んだ。

今、必死に山道を歩いているが、歩き切ってどこかへ辿り着いたところで、どうなるのか。

真っ裸の女が出て来たところで、変態扱いされ、警察に突き出されるのがオチ。

助けを求められる者がいればいいが、頼りに出来る者等一人も思い浮かばない。

彼女の周りにいたのは、ゴウマン・インターナショナル・グループの会長令嬢か、ネズミコー・グループの総帥の妻、という肩書きに当て込んでの事。

会長令嬢でも、総帥の妻でもない、下等な庶民同然の女に成り下がってしまった彼女に言い寄る者はいない。

現時点で表に出たら、下手すると精神病院行きになる。

そんなのは嫌だ。

「もう、どうしよう」

金田金子は号泣した。

何故こんな事になってしまったのか。

『ブーガ』だ。

夫がある日突然、『ブーガ』しか言えなくなってしまった。

と思ったら、『総帥の妻』という座を奪われてしまった。

諦めて実家に帰ったら、父も『ブーガ』しか言えなくなっていた。

そして、『会長令嬢』という地位からも転落してしまった。

『ブーガ』とは何なのか。

何故二人は『ブーガ』しか言えなくなってしまったのか。

何故あつという間に何もかも失ってしまったのか。

金田金子は『ブーガ』と、それに乗じて彼女から全てを奪った連中を恨んだ。

「畜生。何が『ブーガ』だ。全員ぶっ殺してやる」

と、誓う。

その時点で、また盛大にくしゃみした。

空を見上げる。

葉と葉の隙間から覗く空が、暗くなっている。

日が落ちている様だ。

——ここで愚図愚図しちゃいけない。

金田金子は立ち上がると、歩き始めた。

……というか、歩き出そうとした。

「あれ？」

辺りを見回す。

腰を下ろしている間に、方向感覚を失ってしまった。

自分がどちらの方向からやって来て、どちらの方向へ向かっているのか、さっぱり分からない

来た道も行く道も、樹木に囲まれた山道なのだ。

――え？ 嘘。

山を下る道が正しい方向の筈。が、この辺りは傾斜が殆どなく、どちらを向いても上がっている一方で、下っている様にも見える。

山道を経て山から脱出する、という一見簡単そうな目標すら達成出来ない。

「もう！ 何でこんな事になるの？」

金田金子は、適当に足を進め始めた。

足から伝わる痛みを無視して、前進する。

どうやら選択を誤ったらしい。

道がどんどん狭くなって行き、車一台どころか、人一人すら通過出来なくなっていた。

暗くなっているのも、助けにならない。

山道だ。街灯は無い。

一メートル先も見えなくなっていた。

手探りで前へ前へ、と進む。

「あっ」

枝葉に覆われた地面を踏んだと思ったが、違った。

空気を踏んでいた。

転倒する。

倒れたところには何も無かった。空気だけだ。

「え？」

金田金子は、超高速で斜面を転げ落ちた。

「ヒイイイイーッ」

悲鳴を上げてみても、斜面を転げ落ちる速度は変わらなかった。

寧ろ加速する。

頭部を岩や切り株に幾度も打ち付け、意識が薄れていく。

十数回目の岩に額が接触した時点で、意識を完全に失った。

BOOGAMANIA (012) : 仙人

「いい加減、いつまで気を失っておるのじゃ。さっさと目を覚ませ、糞女が」

……の罵声で、金田金子は目を覚ました。

辺りを見回す。

みすぼらしい小屋らしき空間の中にいた。

「ここは……？」

「儂の住まいじゃ、この糞女」

と、相手が言う。

長い白髪に、長い髭を蓄え、ボロボロになった着物らしき衣服を纏う老人だった。

絵本で見る仙人を薄汚く、胡散臭くしたバージョンである。

「やっと目を覚ましたか、糞女が！」

「あたしは糞女じゃない！」

「糞女じゃ」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃ……」

「糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃ……」

「糞、糞、糞、糞、糞女」

「糞女じゃ……」

「糞、糞、糞、糞、糞女！」

と、仙人風の老人は腰を振って踊った。

「糞、糞、糞、糞、糞女！」

と、仙人風の老人は腰を振って踊り続けた。

「糞女じゃ……」

仙人風の老人は、金田金子を無視して踊り続けた。下手な歌も続ける。

糞、糞、糞、糞、糞女！

頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞女！

生み出せるのは糞しかない

糞、糞、糞、糞、糞女！

言う事やる事全て糞

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞に塗れて死ぬだろう

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞、糞、糞、糞、糞女！

「糞女じゃ……」

「ほう。糞女ではないと言うのか。では、何者だ？」

「あたしは金田金子よ。ゴウマン・インターナショナル・グループの会長令嬢で、ネズミコー・グループの総帥の妻よ」

仙人風の老人はせせら笑った。

「ゴウマン・インターナショナル・グループの会長令嬢？ ネズミコー・グループの総帥の妻？ 何を言っておる。ゴウマン・インターナショナル・グループはネズミコー・グループに吸収合併された。会長など存在しない。無論、会長令嬢もな。ネズミコー・グループの新総帥にはピチピチでべっぴんでナイスバディでナチュラルビューティーの若い妻がおる。お前みたいな薄汚くて整形しまくりの糞女とは正反対の女がな。お前はそこらにいる下等な庶民と同じじゃ」

「あたしは下等な庶民じゃない！」

と、金田金子は唾を飛ばしながら叫んだ。

「お前はそこらにいる下等な庶民じゃ」

「あたしは下等な庶民じゃない！」

「お前はそこらにいる下等な庶民じゃ」

「あたしは下等な庶民じゃない！」

「お前はそこらにいる下等な庶民じゃ」

「あたしは下等な庶民じゃない！」

「お前はそこらにいる下等な庶民じゃ、庶民じゃ、庶民じゃ」

と、仙人風の老人は腰を振って踊った。

「あたしは下等な庶民じゃない！」

「お前はそこらにいる下等な庶民じゃ、庶民じゃ、庶民じゃ！」

と、仙人風の老人は腰を振って踊り続けた。

「あたしは下等な庶民じゃない！」

仙人風の老人は笑った。

「そう強がってられるのも今の内じゃ、金田金子さんよ」

金田金子は瞬きした。

「え？ あたしを知ってるの？」

「その糞面なら一目見れば直ぐ分かる」

「糞面じゃない」

「糞面じゃ」

「糞面じゃない」

「糞面じゃ」

「糞面じゃない」

「糞面、糞面、糞面じゃ」

と、仙人風の老人は腰を振って踊った。

「糞面じゃない」

「糞面、糞面、糞面じゃ！」

と、仙人風の老人は腰を振って踊り続けた。

「糞面じゃない」

仙人風の老人は、金田金子を無視して踊り続けた。下手な歌も続ける。

糞、糞、糞、糞、糞面じゃ！
頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞面じゃ！
生み出せるのは糞しかない

糞、糞、糞、糞、糞面じゃ！
言う事やる事全て糞

糞、糞、糞、糞、糞面じゃ！
糞に塗れて死ぬだろう

糞、糞、糞、糞、糞面じゃ！
糞、糞、糞、糞、糞面じゃ！

「糞面じゃない！」

仙人風の老人はまた笑った。

「そう強がってられるのも今の内じゃ。お前の夫はBOOGAMANIAを発症した。お前の父親もな。となると、お前と関わりを持ちたがる者等誰もおらんわ」

「な、何故それを知ってるの？」

「BOOGAMANIAに関してなら、何でも知っておる」

「BOOGAMANIA、て何なの？」

「世間では原因不明の疾病、とされておるが、実は違う」

「……違うの？」

「生物化学兵器じゃ」

「兵器？」

「そうじゃ。世界征服を企む秘密結社のブーガブーガ軍団が作り出した恐ろしい秘密兵器じゃ」

「ブーガブーガ軍団？」

「ブーガ神を信仰する下劣で邪悪な集団じゃ」

「ブーガ神？」

「四大文明以前の人類を一〇万年間にわたって支配していた強力な神じゃ。人類に様々な災難をもたらしていた。一時は力を失い、廃れてしまっていたが、完全に消滅した訳ではなく、細々と繋ぎ止められ、徐々に力を蓄えるようになり、現在は世界制服を企むまでに復活した」

「馬鹿じゃない、あんた？」

「馬鹿ではない。アホじゃ。脳足りんじゃ。間抜けじゃ。頓馬じゃ。唐変木じゃ。スットコドッコイじゃ。プンプクリンじゃ。アンポンタンじゃ。チンチクリンじゃ。プンプンじゃ。ポレポレじゃ。フニャフニャホニャじゃ。ポッテポッテじゃ」

と、仙人風の老人は宣言した。「ブーガブーガ軍団は、ブーガ神を完全復活させる為、着々と手を打っておる。ネズミコー・グループやゴウマン・インターナショナル・グループを支配下に置いたのも、その企みの一環だ」

「ブーガブーガ軍団はブーガ神を復活させる為に、あたしからネズミコー・グループ総裁婦人やゴウマン・インターナショナル・グループ会長令嬢の座を奪ったの？」

「そうじゃ。お前みたいな糞女が相手だったら、奪うのは赤子の手を捻る以上に簡単だっただろう」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「あたしは糞女じゃない」

「糞、糞、糞、糞、糞女」

「あたしは糞女じゃない」

「糞、糞、糞、糞、糞女！」

と、仙人風の老人は腰を振って踊った。

「あたしは糞女じゃない」

「糞、糞、糞、糞、糞女！」

と、仙人風の老人は腰を振って踊り続けた。

「糞女じゃ……」

仙人風の老人は、金田金子を無視して踊り続けた。下手な歌も続ける。

糞、糞、糞、糞、糞女！

頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞女！

生み出せるのは糞しかない

糞、糞、糞、糞、糞女！

言う事やる事全て糞

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞に塗れて死ぬだろう

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞、糞、糞、糞、糞女！

「あたしは糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞女じゃなかったら、自分の今の立場をどう説明する？」

金田金子は言葉に詰まった。

「……全て取り返してやるから、大丈夫」

仙人風の老人は腹を抱えて笑った。

「真っ裸の糞女に何が出来る？ 総裁婦人や会長の座も、契約書に署名して失ったんだろう？
何が書いてあるのかわりに確認もせず署名して、何もかも失った。そんな単純な手で何もかも失
う糞女が、ブーガブーガ軍団に対抗出来ると本気で思っておるのか？」

凶星を指されて、金田金子はますます言葉に詰まった。

「……ブーガブーガ軍団に対抗するのは不可能なの？」

「そこらに転がっている常人では無理じゃ。国家でも無理じゃ。ジェyson・ボーヒーズでも、
フレディ・クルーガーでも、サンタクロースでも無理じゃ。世界がブーガブーガ軍団に征服され
るのは時間の問題じゃ」

「そ、そんな事許したら駄目じゃない！ 対抗する手段は無いの？」

「無い訳ではない」

「ブーガブーガ軍団に対抗出来る人がいるの？」

仙人風の老人は、金田金子をじっと見つめていたが、

「いない訳ではない」

「じゃ、その人を呼んで来なきゃ！」

仙人風の老人は首を横に振った。

「今となっては無理じゃ。ブーガブーガ軍団は力を付け過ぎてしまった。一人ではどうしようも
ない」

「その一人とは？」

「儂じゃ」

金田金子は、口をぽかんと開けた。

「あんたは一体何者なの？」

「ウガラ仙人じゃ」

「ウガラ仙人？ ウガラ、て何？」

「ウガラ神の教えを受けて修行する者だ」

「ウガラ神、て何？」

「ブーガ神同様、四大文明以前の人類を一〇万年間にわたって支配していた強力な神じゃ。人類に様々なご利益をもたらしてきた。ブーガ神が一時廃れたのも、ウガラ神との戦いで力を消耗してしまったからだ。ウガラ神も同様に力を消耗してしまったが」

「引き分けだった、て事？」

「そうじゃ」

「ブーガ神はブーガブーガ軍団を結成して力を蓄え、世界征服へと向かっているのに、ウガラ神は何をやっているの？」

「何もやっておらん」

「何故よ？」

「ブーガブーガ軍団は結成してから直ちに世界に散らばり、各地で細々と暮らしていたウガラの信者——ウガラ戦士——らを狩り出しては屠ってきた。ウガラ神は真っ向から対抗出来る状況にない」

「何て頼りない」

と、金田金子は呆れた。「あんたはウガラ神の信者なのね？ 戦士なのね？ 一人で戦えないの？」

「残念ながら、儂は見ての通り老いている。以前程の力は発揮出来ない。戦士の役目は果たせない」

「もっと若い頃に戦士として戦えば良かったのに」

「馬鹿者！」

と、ウガラ仙人は嘸み付いた。「ウガラ戦士になる為の修行は一日や二日で終わるものではない。何十年とかかる。儂の場合、胎児の頃に始め、先日やっと修行を終えた」

「あんた、何歳？」

「三四三歳じゃ」

「三〇〇歳？ 嘘でしょ！」

道理で、皺にシミだらけで、薄汚く、腐臭に近い体臭を漂わせている訳だ。

「嘘ではない。ウガラ戦士になるには、それだけの時間がかかるのじゃ」

「先日ウガラ戦士になったばかりなんでしょ？ なのにもう戦士じゃないの？」

「ウガラ戦士としての寿命は通常三日程度だ。何せ、修行が三〇〇年以上も続くからな。体力も精力も持続せん。EDになって五〇年経っておる」

三〇〇年（一二万五〇〇〇日超）かけてウガラ戦士になる修行をしながら、ウガラ戦士として活躍出来るのは三日。

蟬より過酷な運命である。

何故ウガラ戦士になろう、なんて思ったのか。

「他にウガラ戦士はいないの？」

「ウガラ神を信仰する者は、今となっては儂しかおらん。その儂もウガラ戦士としては活動出来ない。したがって、他にウガラ戦士はいない」

「新たなウガラ戦士を育成したら？」

「糞みたいに辛い辛い修行に耐えられる者等、今時おらんわ。何もかもパソコンやケータイやタブレットで済ませる時代じゃからの」

「でも、このままだとブーガブーガ軍団が世界を征服しちゃうじゃない！」

「それも悪くはないかも知れん」

「そう？ どうなるの？」

「地球中の者がブーガ神の信仰を強要される。地球中の者が『ブーガ、ブーガ』と唱えるようになる。地球中の者が『ブーガ』以外、何も考えられなくなる」

「そんなの駄目！」

「駄目だろうと何だろうと、ブーガ神とブーガブーガ軍団に対抗出来る勢力は最早存在しないのだ。諦めろ。今から『ブーガ』と唱える練習をしておけ」

「ヤダ！ そんなの絶対ヤダ！ ……あたしがブーガ神とブーガブーガ軍団と戦う！」

「馬鹿者。ウガラ戦士でもないお前が戦える訳がない」

「ウガラ戦士になる！」

「どうやってウガラ戦士になるのじゃ？」

「あんた、修行の仕方を知ってるでしょ？ 修行を終えればウガラ戦士になれるんでしょ？」

「修行さえ積みばウガラ戦士にはなれるが……。お前には無理じゃ」

「何故？」

「糞女だからじゃ」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「あたしは糞女じゃない」

「糞、糞、糞、糞、糞女」

「あたしは糞女じゃない」

「糞、糞、糞、糞、糞女！」

と、仙人風の老人は腰を振って踊った。

「あたしは糞女じゃない」

「糞、糞、糞、糞、糞女！」

と、仙人風の老人は腰を振って踊り続けた。

「あたしは糞女じゃない」

仙人風の老人は、金田金子を無視して踊り続けた。下手な歌も続ける。

糞、糞、糞、糞、糞女！

頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞女！

生み出せるのは糞しかない

糞、糞、糞、糞、糞女！

言う事やる事全て糞

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞に塗れて死ぬだろう

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞、糞、糞、糞、糞女！

「あたしは糞女じゃない！ 糞女じゃない！ 糞女じゃない！」

「糞女じゃ。散々やりまくったのに、ちっとも反応しなかった。マグロとやっていた気分じゃった」

金田金子は飛び上がった。

「あんた、あたしが気を失ってる間にあたしとやりまくったの？」

「当たり前じゃ。誰がお前みたいな糞女をタダで助ける？」

金田金子は、その場面を想像して、反吐が出そうになった。

「EDだったんじゃない？」

「そうじゃ。結局EDのままで終わった」

「フン。そうでしょうね。とにかく、あたしはウガラ戦士になる！」

「なれん」

「なる！」

「なれん」

「なる！」

「なれん」

「なる！」

ウガラ仙人は溜息をついた。

「そこまで言うのなら修行の仕方を教えてやろう。覚悟するか？」

「する、する」

ウガラ仙人は、どこからか紙を引っ張り出した。

「それなら、この契約書に署名しろ」

金田金子は、紙面に目をやった。

顕微鏡を使わないと読めないくらい細かい文字が、何列にもわたって続いていた。

「署名するの？」

「署名しないと教えられん」

「でも、以前契約書に署名して酷い目に遭ったから……」

「署名出来ないなら、今から『ブーガ』と唱える練習をしておけ。お前の糞親父と同様にな」

金田金子は、渋々契約書に署名した。

ウガラ仙人は、署名された契約書を確認すると、懐にしまった。

「じゃ、修行について教えてやる」

「あ、その前に……」

「何じゃ？」

「何か身に着ける物を頂戴」

「何故じゃ？」

「真っ裸だから」

「それがどうした？」

「服を着てないと駄目でしょ！」

「糞女は虫けらと同じじゃ。服を身に着けた虫けらなどおるか？ おらんだろう。だから糞女に服を着せる必要は無い。契約書にも明記されておるぞ。『修行者は糞だ』と。読まなかったのか？」

「一応読んだけど……」

と、金田金子はバレバレの嘘をつく。

「じゃ、納得してるんだろう。お前は糞女だ、と」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「あたしは糞女じゃない」

「糞女じゃ」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ」

「糞女じゃない！」

「糞女じゃ。糞、糞、糞、糞、糞女」

「あたしは糞女じゃない」

「糞、糞、糞、糞女」

「あたしは糞女じゃない」

「糞、糞、糞、糞、糞女！」

と、仙人風の老人は腰を振って踊った。

「あたしは糞女じゃない」

「糞、糞、糞、糞、糞女！」

と、仙人風の老人は腰を振って踊り続けた。

糞、糞、糞、糞、糞女！

頭蓋の中も糞だらけ

糞、糞、糞、糞、糞女！

生み出せるのは糞しかない

糞、糞、糞、糞、糞女！

言う事やる事全て糞

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞に塗れて死ぬだろう

糞、糞、糞、糞、糞女！

糞、糞、糞、糞、糞女！

「糞女じゃない！」

「ほう。糞女ではないと言うのか。では、何者だ？」

「とにかく、糞女じゃない」

「糞女じゃ。三〇〇歳の爺とやりまくる糞女」

「あんたが勝手にやったんでしょ！」

「お前は自分が正しいと思っている、と言うのか？」

「当たり前でしょ」

「そしてお前は儂が間違っている、と言うのか？」

「当たり前よ」

「儂は自分が間違っている事を認め、お前に謝罪すべき、と考えておるのか？」

「そりゃそうよ」

「そうか」

と、ウガラ仙人は呟くと、三〇〇歳（多分、眉唾だろう）とは思えない勢いで立ち上がった。小屋の中心に移動する。唱え始めた。「UGALA、UGALA、UGALA……」

——何言ってんの、この糞爺は？

と、金田金子は首を捻った。

「UGALA、UGALA、UGALA……」

ウガラ仙人は唱えながら尻を振った。舌を出しては引っ込める。左目を時計回り、右目を反時計回りに動かす。左足を上げ、更に右足も上げる。首を三六〇度回転させた。

気持ち悪い舞踊を目にして、金田金子は引いた。

——何やってんのよ、この糞爺は？

「UGALAボンバーッ！」

と、ウガラ仙人は突然叫ぶと、金田金子に向けて両手を突き出した。

ウガラ仙人の手から、青白い光線が発射される。

青い光線は、金田金子の顔面を直撃した。

巨大な張り手を食らった様な衝撃で、金田金子は後方に吹っ飛んだ。小屋の壁を突き破り、外へ転げ出る。

落ち葉に覆われた地面を一〇メートル程転がった後、漸く止まる。

激痛に悩まされて当然だが、金田金子はあまりの驚きで痛みを感じている余裕も、意識を失っている余裕もなかった。

「――な、何、今のは？」

ウガラ仙人は、壁に出来た穴から外に踏み出た。金田金子に無言で歩み寄る。

「さ、さっきのは何？」

「UGALAボンバァーッ！」

と、ウガラ仙人は再度叫ぶと、また両手を突き出した。青白い光線が発射される。

青い光線が、金田金子の胸部を直撃した。

「キャッ」

金田金子は二〇メートルも弾き飛ばされ、樹木に激突した。

生き絶え絶えで倒れている金田金子の顔面を、ウガラ仙人が草履の足で踏み付ける。

「儂は間違っとらん。お前は糞女じゃ。契約書にも明記されておる」

「……あ、あたしは糞女じゃな……」

「UGALAボンバァーッ！」

と、ウガラ仙人はまた叫ぶと、両手を突き出した。青白い光線が発射される。地面に倒れている金田金子の腹部を直撃した。

「グワッ」

金田金子は血を吹いて仰け反った。

ウガラ仙人は無言でつかつかと近寄ると、金田金子の顔面を跨いだ。

ウガラ仙人は薄汚い着物の下には何も着けていなかったのので、金田金子は糞臭を放つ局部を目の当たりにした。

「――な、何？」

ウガラ仙人が、思い切り排泄する。

金田金子は、あのしょぼい身体はどこにどう溜めていたのか、と不思議に思う程の排泄物を顔面に食らった。避けたくても、身体が激痛で動いてくれない。次から次へと落下する排泄物を顔面で受けるしかなかった。

排泄を終えたウガラ仙人は、一步下がると、

「ほれ、お前は糞女じゃ。正真正銘のな」

激痛と悪臭に悶える金田金子は、号泣しながら、

「……あたしは糞女です」

「糞女は虫けらと同じじゃ」

「……虫けらと同じです」

「虫けらは服を着るか？」

「……着ません」

「それなら、お前も服を着る必要等ないじゃろう。そうだな？」

「はい。服を着る必要はありません」

「分かったなら良い。では、修行を始める」

と、ウガラ仙人は何でも無い様に言うと、小屋に戻った。

金田金子は、その後姿を、齒軋りしながら見守った。顔を拭う。

——この糞爺をいつかぶっ殺してやる。